台湾産オオルリモンアゲハについての知見

張　保　信
中華民国台湾省桃園県楊梅鎮中山路63巷8一1号

Notes on the food-plant, larval habits and distribution of *Papilio paris nakaharai* Shirôzu in Formosa (Lepidoptera: Papilionidae)

BAW-SING CHANG

1960年に白水は台湾北部に産するルリモンアゲハに，1)大形，2)後翅表面の青緑色大斑の形の相違を根拠として *Papilio paris nakaharai* の亜種名を与えた．その後，台湾産ルリモンアゲハ *P. paris hermosanus* Rebel とオオルリモンアゲハ *P. p. nakaharai* Shirôzu は五十嵐（1966），室谷ら（1967c）らによって論じられているが，詳細な分布や食草に問題を残している．近年来私は若干の知見を得ることができたので，ここに報告する．

食草　オオルリモンアゲハの食草は台湾北部新店渓，基隆河，宜蘭濁水渓，武老坑渓などの限られた地区の流域に自生するオオバアワダン *Evodia merrillii* Kanehira et Sasaki で，私は産卵を目撃した以外に，この木から卵，幼虫，蛹殻などを採集した．これは現在私の知っている自然状態における唯一の食草である．ルリモンアゲハの食草はサルカケミカン *Toddalia asiatica* で科を同じくするがやや縁遠い．

産卵行動　産卵に選ばれる葉はやや老熟したのが好適で，新芽はあまり使用されない．母蝶は *Papilio* に共通な産卵姿勢をとり葉面中央附近に1粒づつ産み付ける．

幼虫の攝食　幼虫の形態については五十嵐（1966）が詳しく述べているので，摂食行動のみを記したい．

初齢幼虫は孵化後卵殻の大部分をかじり短時間の休息後葉縁部に移動し摂食を始める．食樹の葉面積が広いため，3齢までは同一葉上で生活するが，摂食量の増加にともない附近の葉へ移動が始まる．摂食後は老熟葉上に吐糸で中脈上に作った足場へ戻り休息をとるが，次の摂食時には，同じルートをとり食べかけの半老熟葉へと移動する．4・5齢時に休息，脱皮の足場に使用される老熟葉は摂食の対象とはならない．

分布　食樹オオバアワダンの自生する新店渓の注入する淡水渓の別支流桃園県大漢渓一帯にはルリモンアゲハのみを産し，はっきりとした分布の境界が見られる．オオルリモンアゲハとルリモンアゲハの分布について長年興味を持ち続け，ことに台湾北部での採集には注意をはらってきたが桃園県山地の復興郷（淡水渓上流）ではルリモンアゲハのみ，新竹県湖南村で採集したのもルリモンアゲハであった．台北，烏来などで採集されたルリモンアゲハの古い記録や，棲分け線以南の新竹県桃山のオオルリモンアゲハの記録はすべて1960年以前のもので，当時はオオルリモンアゲハ *nakaharai* とルリモンアゲハ *hermosanus* の区別がはっきりしていなかったため混同されていたのではないだろうか．現在の私にはその標本を見る機会に恵まれ
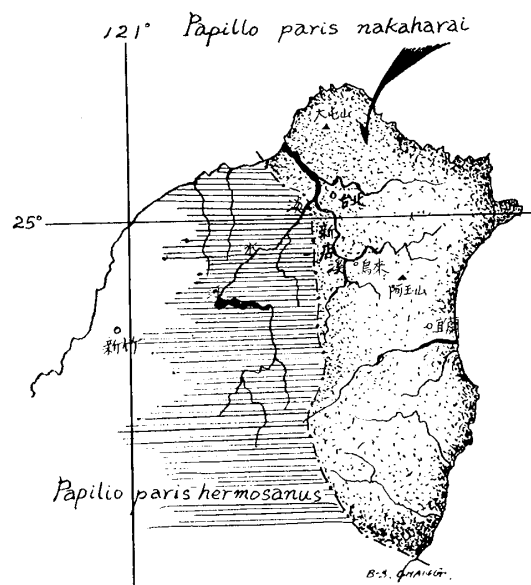
Fig. 1. オオルリモンアゲハとルリモンアゲハの分布概念図．

ていないため結論を下すことができないのが心残りである.

終りに日項からご教示をいただいている白水隆教授に紙面を借り深く感謝したい.

参考文献

Igarashi, S. (1966) Butterflies of Nepal (Immature Stages). *Spec. Bull. Lep. Soc. Jap.* No. 2 : 1-73.

室谷洋司ら (1967a) 台湾産蝶類採集目録と成虫の生態に関する覚書. 日本鱗翅学会特別報告第3号 : 1—50.

室谷洋司ら (1967b) 台湾産蝶類幼虫採集に関する覚書. 日本鱗翅学会特別報告第3号 : 51—60.

室谷洋司ら (1967c) 台湾産蝶類28種の幼生期の研究. 日本鱗翅学会特別報告第3号 : 117—149.

白水 隆 (1960) 原色台湾蝶類大図鑑. 保育社, 大阪.

台湾総督府 (1936) 台湾樹木誌. 台北.

山中正夫 (1971) 台湾産蝶類の分布 (1). 日本鱗翅学会特別報告第5号 : 115—191.

編集者よりのお願い

「蝶と蛾」に寄稿いただきます際には, **投稿についての注意事項**に従って原稿を作成下さいますように, との相変わらずのお願いを書かなければなりませんのはまことに遺憾なことであります. この規定 (注意事項) は, 一読いただきましたならば十分理解していただけると思うのですが, 非常に簡単なものでありまして, 「蝶と蛾」の編集に必要な最少・最低の条件を列挙しましたものに過ぎません. 従って, この規定によって原稿を作成していただきますことは, そんなに面倒なことではないと思います. しかし, 現実には, 寄せられます原稿は編集者を困惑させ, その調整・挿図の手直しなどのために考えられないほどの莫大な手数・時間・費用を要しますところの非常識な原稿が跡を絶ちません. この状態が続きますと, 投稿量の少ないこととあいまって, 「蝶と蛾」の定期的な発行が危ぶまれます. 雑誌の編集には一定の方針があります. 形式をすべて著者の自由に任しているような不見識な雑誌はありませんし, 「蝶と蛾」の場合も原稿の作成は当然寄稿規定に従っていただかなくてはなりません. 今後「蝶と蛾」の刊行を円滑にはかどらしますためには, 編集事務はできる限り本来の編集事務の仕事のみにとどめたいと思いますので, 寄稿者各位には体裁などは最近の号を参考にしていただき, どうか**投稿についての注意事項**に呉々も留意をいただきまして投稿下さいますことを繰り返し申し上げます. ただし, 始めての投稿で不馴れな方は, 自分の理解できる範囲までで原稿を作成されまして, 遠慮なく寄稿下さい.

(森内 茂)